

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.148

多摩風土記（下原刀匠発祥の地の碑）
芳賀善次郎著『旧鎌倉街道探索の旅』上道山
之道編（二〇一七年さきたま出版会）は鎌倉街
道山之道沿線八王子市恩方地区に立つ「市史跡
下原刀匠発祥の地」の碑を紹介している。下原
刀は永正の頃に桑下城主大石氏の招きに応じた
刀匠周重を祖とし、恩方下原に移り、北条氏な
らびに徳川氏の庇護をうけ、その作刀は全国に
流布されたという。
(健介)



ラオス紀行
俳句とともに

霧野萬地郎（波・同人）

東南アジアの内陸国ラオスは敬虔な仏教徒が多く、自然の溢れる美しい国です。日本からこの国への観光は今一つですが、欧米のアウト・ドア派の若者たちには人気は高く、特に自転車で森や川を巡るツーリングが好まれています。そんなラオスを二〇〇九年の十二月に訪ねた記録を俳句とともに記します。

到着した日はラオス人民民主共和国の建国記念日。一九七五年の十二月二日に無血革命をもって、王国から共和国として新政府が発足した。ラオスの歴史は十四世紀にラーオ族による統一王朝ラーンサン王国から始まる。内陸国として長い間、隣国のタイやカンボジアそしてベトナムとの抗争などが続いた。

十九世紀半ばにフランス保護領となり仏領インドシナに編入された。第二次大戦時の日本支配下では一時独立宣言をした。戦後はフランス連合内のラオス王国として独立したが、右派、中道、左派のパテトラオの三派による内戦が続く。一九七五年に南ベトナムのサイゴンが陥落すると、三派の駆け引きの中にもパテトラオの主張を大幅に取り入れて王政の廃止を宣言し、ラオス人民民主共和国を樹立した。

寄進して放つ籠鳥冬ぬくし

首都ビエンチャンのタートルアンはラオス仏教の最高の寺院で、ラオスの象徴でもある。伝承では三世紀頃インドからの使の一行がブッタの胸骨を納めるために建立したと伝えられる。その後、一五六六年にセタテイラート王により、四方を四つの寺院に囲まれる形で再建されたが、現在は北と南の寺院が残るのみ。金色を施した北の寺院、ワットタートルアンヌアはラオス仏教界最高位の僧侶の住まいである。

寺院の広場で籠鳥を売る少年に出会った。寄進して放鳥すれ

ば、観光客は功德を施したとされる。早速に二ドルで二羽の鳥を逃がしてやった。逃げた鳥は少年の家に戻るように馴らされていると云う人もいたが、どうだろうか。

年内に届け少女の車椅子

子供の車椅子はその児の成長に合わせて交換する必要がある。日本では社会保障制度で、車椅子を必要とする身障者の子供へは、その児の成長に合わせて費用負担も10%程で新しい車椅子に替えられる。これまでは廃棄されていたその中古の車椅子を整備清掃して途上国へ送る活動、「海外に子供用車椅子を送る会」のビエンチャンでの引渡式の出席も兼ねて、この会の理事であるK氏と一緒にその引渡式に参加し、ラオス青年同盟の幹部とビエンチャン郊外の身障者リハビリセンターへ行った引き渡し式での一句。

施設の建物には「日本政府と人民の支援で建設」とのプレートがあった。「ジャパン」でなく「ビープル オブ ジャパン」が社会主義の国らしい表示だ。治療とリハビリだけでなく、義足を作る作業場や車椅子メンテ工場、入院施設も整えられている広い構内で、丁度、五、六名の子供が治療や義足の取り付けに来ていた。担当の女医さんの話では、「肢体不自由児をこの施設にまで連れて来る事が出来る家庭は極めて少ない。費用だけでなくアクセスの手段が無いのが実情だ」との事、そんな子供たちは生涯に亘って家から出られない、と訴えていた。

爆弾の解体されて葱の鉢

その身障者リハビリセンターでの一句。ラオスは最も多くの地雷や不発弾が地中にあると云われる。ベトナム戦でのアメリカ軍がラオス内を走る北からの補給路（ホーチミンルート）へ攻撃した負の遺産なのだ。当時、人口三百万人に三百万トンの膨大な爆弾が落とされたと云われる。その多くはナバーム弾で、空中で葉莖からばら撒かれた小粒の不発弾もある。そのため今でも毎年百人近い犠牲者があると云われる。これらの葉莖は拾われ、貴重な鉄鋼材として、家の柱やランタナなどに再利用されている。

プルメリア若き尼僧の声弾む

ラオス航空でビエンチャンから南のパークセへ飛び、プリ・アンコールと称される世界遺産、ワットプー遺跡を目指した。この遺跡は十一世紀のクメール王朝時代にヒンドゥーの都城として建立されて、王朝滅亡後も仏教信仰の対象として現在まで大きな破壊は免れた。この壮大な寺院を中心とした様式はカンボジアのアンコール・ワットへ継承され、二〇〇一年にラオスで二番目の世界遺産として登録された。

リングの石柱の並ぶ参道から山の斜面に沿うように、崩れかかった宮殿やテラス、歩廊などクメールの寺院遺跡が続く。長い参道が急斜面の石段にかかると、その左右にラオスの国花プルメリアが咲き満ちて強い香りを放っている。黄衣の少年僧と

白衣の若い尼僧らがブルメリアの芳香の間を歩く姿には清々しい空気が漂うようだ。その先生格の僧の腕に刺青が彫られているのには驚いた。

一泊したメコン川の中州の島では盛大な祭りで夜遅くまで大賑わい。朝には勇壮なドラゴンレースなどを見る機会もあった。

夕方には北部の観光名所、ルアンパバーンへ移動した。

みかんもて喜捨の並びに加わりぬ

ルアンパバーンの宿の前には托鉢僧の列がやってくる。早朝の六時頃から喜捨する蒸した粳米の籠が等間隔に置かれ、信徒たちも徐々に集まって歩道に座り始める。女性は左肩から襷を掛けている。遠方からトゥクトゥクに乗って来る人もいる。やがて、寺から橙色の衣の托鉢僧が次から次へ、少年から老年まで、百人以上が丸い真鍮の鉢を肩から吊るし、肅々と進む。喜捨は座って行う。蒸し米だけでなく、バナナやみかんなど、そして蓮の花を捧げるグループもある。私もみかんを買った。鉢に一杯になった喜捨された物は所々に集められ、纏めて寺へ持ち帰る手順もありそうだ。無口な列は延々十分も続き渡り、その後にも別な寺からの僧が時折過ぎて行つた。この托鉢風景は毎日欠かさず続いているのだ。

古都ルアンパバーンは一三五三年に首都とされ、ラーンサーン王国の中心として栄えた。その後も王朝の象徴として、一九七五年の建国まで王宮が置かれた。そして、市街地全体が

一九九五年に世界文化遺産として登録された。この町の至宝、ワット・シエントーン寺院や王宮などを見学して、夕方には高いプーシー山に登り、メコン川とその支流に挟まれた美しい町全体を一望できた。

冬ぬくし老いたる象の背ナに揺れ

翌日の午前中はルアンパバーン郊外で象乗りを体験した。ラオスの主要産業は林業で、多くの象が森に入って木材の運搬に携わってきたが、その象たちも老齢になつては過酷な使役に耐えられない。これまでは、使い捨てられる形で、食料や水も十分に与えられずに村はずれに集められ、ひもじくも悲しい老後を過ごしていた。そんな状況を救う様に、象乗り観光は軽い負荷での仕事。仲間の象たちと一緒に森へ、そして、川へ入って、活き活きとした余生を過ごす事が出来る。加えて、ラオスの外貨獲得にも大いに貢献している様だ。背中に設えられた二人乗りの籠に客が乗り、象使いの若者は象の頭部に跨がる。山道を下り、川の中へも巧みに御して行く。川の中州では、私にも頭部に跨ぐように云われ、象の耳裏をつま先で叩いて、些かとは云え、象との交流を楽しむ事も出来た。

ラオスは東南アジアの内陸国で、近隣の国々の侵略、そして、近くはベトナム戦争にも悩まされ続けた。「もう、戦はご免です」を示す仏像などもある。今は平和なそして自然溢れる国です。

あけぼの集

台風裡頼みの綱の送電線八王子青木 隆
 少年を思い残して秋日和八王子赤野 四羽
 緑蔭や思ひ思ひの指定席国分寺秋山ふみ子
 火曜日^に会うて土曜日^の尾多 摩足立喜美子
 噴水をぐるりと囲む背の仮死小 平安達 昌代
 想念の容を変えて日陰蝶清 瀬穴原 達治
 座りよき石あり竜田姫を待つ 稲城 新井 温子
 新涼の朝湯に延ばす老軀かな八王子荒川勢津子
 水澄むや自由をはかる目がくもる 町田 有坂 花野
 あじさいに私雨の降る夜かな国分寺安西 篤
 優しさは強さでもある秋桜^{東久留米}飯田 玉記
 角のなき消しゴム一つ処暑の風多 摩石川 春兎
 天主堂の被爆写真集秋の石小 平石橋いろり
 寂しさも一つの読点秋彼岸練 馬石原 俊彦
 母恋ふも招き給ふな曼珠沙華八王子市川 春蘭
 無住寺に人の声あり孟蘭盆会青 梅一ノ瀬順子
 塗りたてのベンチにこぼす十三夜 江伊東 類
 熱帯夜囁つたやうに金魚の眼町 田稲吉 豊

新酒酌む妻と旅せしベニス赤町 田今田 述
 人に生まれゴリラに生まれ露けしや武蔵野江中 真弓
 幻聴のオオシマゼミは好色か府 中大井 恒行
 冷房のかたまり玉堂美術館府 中大石 雄鬼
 水澄むや終活準備遅々として日 野大槻 正茂
 かなかなや居間に残れり子等の声八王子大谷みどり
 夕顔の一難去つて源氏かな立 川大友 恭子
 鰯雲一緒に流れていきましよう川 崎大西 恵
 悪法もまた法なるや茗荷の子三 鷹大森 敦夫
 九条のくにの居心地わたり鳥昭 島岡崎たかね
 さるすべり戦中派われ生きるかな武蔵野岡崎 万寿
 葛が葛搦めて立てり秋暑かな三 鷹小川 葉子
 露草の青を抱きて朝を待ち飯 塚奥野 亜美
 野分雲向ひの屋根をかすりゆく川 崎尾崎 太郎
 名月やみな丸呑みの池の鯉昭 島尾関 英正
 八月やささいなことも交響詩青 梅小野こうふう
 今朝秋や切手を選ぶメ切日稲 城門野ミキ子
 仰ぎ見る空の青さへ散る紅葉西東京金谷サダ子

あけぼの集

八月や記憶の束のほつれゆく日 野亀津ひのとり
 老鷲の囀り高し町棲み処 西東京河 順子
 堤防夜明けて鰯のコンサート立 川川島 一夫
 山の日に山の主の富士拝す調 布菅 さだを
 マスカット兄より届く達者かと清 瀬神崎 幸子
 診断は加齢白桃が眩しい小 平城内 明子
 フィナーレは弾丸のごと大花火大 田小泉満知子
 羅や鍵の重さをいまささらに三 鷹高坂 栄子
 はんなりと聞き返されてワールドコーヒー 西東京 幸村 睦子
 敗戦日正座の背中がゆれ動く府 中小林 育子
 向日葵から向日葵へ橋架けてます町 田小山 健介
 堂々と朝日を浴びて軍需産業立 川今野 修三
 訥々と生きてどっさり梅漬けて多 摩齐田 仁
 朝顔市夜は蕾の明日を売る昭 島坂本 空
 水打って明日へつなぐころざし 東久留米 佐々木克子
 己が影を追ひて踏みゆく夜の秋府 中笹木 弘
 白玉や被爆の父は帽子好き府 中佐藤 栄子
 ノラ猫の一瞥まるで解夏の僧調 布佐藤 菜

産土のひと一節む長き法師蟬昭 島佐藤 光子
 秋深し秘境に入りてリセットす八王子柴 れいこ
 茄子漬けて古代の色を呼び覚ます杉 並島 彩可
 暑い夏逆手に胡瓜二期作に足 利清水 弘一
 あとひとつ見て立ち去らむ遠花火 世田谷鈴木 浮葉
 デイ三時散策に出る蟬しぐれ立 川鈴木かずえ
 ペダル踏む登ってみたい雲の峰小 平鈴木 寿江
 曼殊沙華この道行くの疲れるわ小金井鈴木 佑子
 おのれこそおのれの寄る辺濁り酒町 田栖村 舞
 老いてなほ青きこの星夏木立板 橋諏訪部典子
 もの忘れ互ひに許す心太小 平関 梓
 惑穴い決心だけは何度もする調 布芹沢 愛子
 夏の船旅手すり磨くは異国人小 平高瀬多佳子
 寒晴れや武蔵におほき富士見町 西東京 高原 桐
 泥酔の叔父も加へて生身魂清 瀬谷村 鯛夢
 廃屋へ轍をたどる星月夜 国分寺玉井 豊
 一人ゆくビル街ひっそり晩夏の朝稲 城玉木 康博
 夏の月桑畑へ逃げた爆撃日 野玉木 祐

あけぼの集

民会ベイチエの鐘キエフ公国の秋の暮三 鷹田山 光起
 葡萄育つ言葉をひとつづつ増やし 武蔵野津久井紀代
 蟻列のビリに打水避けて打つ八王子辻 升人
 散歩道高砂百合の群舞かな八王子都筑 遊
 風の盆なべて八尾は坂の町東村山寺尾 令子
 流星のひとつは小鹿の瞳となりぬ立 川遠山 陽子
 名月や研ぎ澄まざるる二の鳥居 西東京戸川 晟
 百日紅旧家の友は同級生杉 並飛永百合子
 荒梅雨の真夜の自販機あかりかな平 塚富山ゆたか
 桃を買ふ傷つきやすき男かな清 瀬永井 潮
 八月の白き光よ死者たちよ立 川中條 啓子
 今八十路当時六歳敗戦日 西東京中田とも子
 実りつつ御息所は水の傍府 中中矢 温
 夜の富士を大きく見せて星流る座 間長野 保代
 絶滅の狼神話律の風 武蔵野夏目 重美
 断捨離を尽くせず残る暑さかな町 田成戸 寿彦
 桃の香の遺る手のまま見送りぬ 国分寺南行ひかる
 久に訪ふ心字の池や杜鵑草 西東京西川 五月

無患子の実のどつさりと雨の朝 世田谷西前 千恵
 千川の残暑に買って棒ダワシ昭 島西村 智治
 白薔薇も紅薔薇も白き露こぼす三 鷹拔山 裕子
 走り根の横に蟬穴並びおり三 鷹根岸 敏三
 シーグラス拾ふ晩夏や神津島三 鷹根岸 操
 朝空を見上げる習い敗戦忌小 平野口 佐稔
 南蛮の鐘吹きあげる椰子の風 八王子野澤 勝美
 きゆるきゆると踏みし鳴き砂星祭羽 村野島 正則
 放牧の牛の眼にある秋の雲青 梅萩原 美沙
 大根干す素肌をすべる夕陽射し 武蔵野蓮見 順子
 雲の峰いくつ崩れて次の峰 武蔵野蓮見 徳郎
 蝉しぐれ大樹の順より歌い出す羽 村花貫 寥
 赤蜻蛉しばらく付いてくる気配多 摩平山 道子
 今朝の秋猫は活字を覆ひ伏す 八王子広井 和之
 浅酌やさて新蕎麦を手繰るとす練 馬淵田 芥門
 夏痩せて好きなものだけ好きだけ 八王子冬木 喬
 言の葉の出口入口星月夜 国立前田 弘
 雲の峰今少年になるところ 国立前田 光枝

あけぼの集

ひと言が心ざらつく梨の皮木更津松本 まり
 残菊美し末は炎となる身かな八王子松元 峯子
 嫋嫋と隣の家の秋の笛 東久留米 三池 泉
 夏が来て恐竜展のグッズ買う 東久留米 三池しみず
 夏山に雲湧き出づる露天風呂 東久留米 三浦 禎三
 称へあふ敬老の日や走り蕎麦 小金井 三浦 土火
 余生なお余白にあらず花菜漬 世田谷 三浦 文子
 終活をいそぐ急がない百日紅町 田 三木 冬子
 去年まで椅子を並べて見た花火 国分寺 水落 清子
 殿中のござりますると松手入 三 鷹 水野 星闇
 みんみんな母との会話繋がらず日 野 満田 光生
 人生の追伸として蟬の声 昭 島 宮腰 秀子
 憲法九条母ていねいに柿を剥く 調 布 宮崎 斗士
 泣く力泣かない力半 夏生 国分寺 武藤 幹
 一面の芒の穂波引き込まれる 小金井 村井 一枝
 残り香に少しの酸味 夏の恋熱 海 望月 哲土
 白雲一片胎動が生む 鰯雲 東村山 森本 由美子
 山河澄む蜻蛉の浮力手に包み 三 鷹 守谷 茂泰

蟬の声すこしさびしくなる夕べ町 田 山崎せつ子
 羅を着て若き日の母に似る 東村山 山崎美紗緒
 遠花火いつしか来ている夫の影 府 中 山本 徳子
 従兄^{あに}逝きて妻の丸き背 晩夏光 八王子 山本ひまわり
 逆縁の墓守る 婆 炉火を継ぐ多 摩 山本みつし
 立秋の風まだ熱をはらみけり 調 布 豊 宣光
 すぐそこと言うが八方つくつくし 稲 城 好井 由江
 青葡萄 茫と灯りし 生家かな 三 鷹 吉川 真実
 足首にからみつく 海髪^{うづ}月夜なり 府 中 吉澤 利枝
 空蟬の記憶のなかに 震度七 東久留米 吉平たもつ
 加齢です妙に 納得 秋の空 国 立 吉村 春風子
 雑草にまぎれ 昼顔 咲きにけり 町 田 米倉 信山
 ロボットに運ばれてきて 生ビール 立 川 米澤 久子
 半分は女とも だち 新酒 酌む 青 梅 渡部 洋一

◇前号の当欄で新会員の小泉満知子さんのお名前を小泉満智子と誤記しました。お詫びして訂正いたします。

青木 一郎

麦の秋農継ぐ人のなき生家

一ノ瀬順子

退職後、妻と二人で野菜や果実作りをしている。自家消費する他、親戚へも送っている。夫婦二人で草取りをしながら、農業ができなくなった時の事を話し合うようになった。この俳句を何回も口ずさむ。今後の我が家を想い、一縷の寂しさを感じた。

稲吉 豊

泉湧く勇氣・詩心・猜疑心

松元 峯子

こんこんと湧く泉を前にしての作者の心懐。勇氣、詩心の綺麗事で終わらないのが人間と喝破している。長い人生の中で、騙された、嵌められたとの経験は誰しももあるだろう。人間の業の悲しさという難しいテーマを上手く一句に仕上げられた。

大西 恵

戦争に注意 白線の内側へ

大井 恒行

踏み出した一歩先には戦争がある。そんな現代。知らず知らずのうちに足を踏み出すのは危険。戦争があると分かっている踏み出すとするのはさらに危険。ふだん耳にする注意喚起をうまく使われたと思います。

門野ミキ子

人新世後退はせぬ蝸牛

小山健介

人新世は人類の時代と言う意味の地質学の新分野。人類の活動が原因で進む地球環境の破壊。これ以上破壊させず、資源を使い過ぎず、未来の世代も平和に豊かに生きてゆける、そんな社会の実現への想いが「後退はせぬ蝸牛」で力強く伝わってくる。

亀津ひのとり

炎天や出アフリカの世界史を

広井 和之

温暖化から沸騰化に入ったという地球。狂気のような猛暑の炎天下に立つて作者は温暖な環境を求めてアフリカを出て世界へ広がった壮大な人類史が頭を過ったか。地球全体が危機的な状況でもはや猶予無し、炎天下に人類の行方を俯瞰する俳句もあり。

小山 健介

ただいまもどりました八月の空耳

蓮見 徳郎

ウクライナで戦争がつづいているこの八月、広島忌、長崎忌、敗戦忌と前の戦争のことを考える。作者の耳の奥で聞こえた声はどなたの声だったのだろうか。お父上か兄上が戦死されたのだろうか。晩夏から初秋にかけての淋しさがよく描かれている。

坂本 空

新茶汲む手鏡ほどに身近な人

宮崎 斗士

中下の表現になるほどと共感する。話が合えば、よくぞ言ってくれたと、自分の考えを相手が映しているかのように思えることがある。物理的、心理的な距離感も、手を伸ばせば相手に届くほどに身近なのである。そんな相手となら茶も美味いだらう。

清水 弘一

虹二重半跏思惟像立ち上る

稲吉 豊

半跏思惟像は弥勒菩薩。さとりをひらいて如来になる為に心を静かに瞑想し、人々を救う修行している姿。その弥勒菩薩が思惟の状態から立ち上るとは。虹の見事さが偲ばれ世界一美しい像に日本の風土が生んだ二重虹が重なる。

鈴木 寿江

麦の秋農継ぐ人のなき生家

一ノ瀬順子

現在社会問題にもなっている空家、近隣にも何軒かあります。みどり豊かな田園風景が目につきます。そんな生家を継ぐ人が誰もいない。それぞれの生き方があると思いますが、非常に悲しいです。みどり豊かな農村を大切にしていきたいものです。

諏訪部紀子

麦の秋農継ぐ人のなき生家

一ノ瀬順子

作者は女性なので結婚を期に生家を出られたのでしょう。でも、代々農業を生業にされてきた生家には後継者がいない。そんな寂しさを「麦の秋」と言う大きな季語で外から漠然と表現したところが素晴らしいと思います。

辻 升人

薔薇の卓空気のような夫でした

佐々木克子

毎号「あけぼの集」注目の一人である。いつもどこでも何かを指摘して生きている一人であろうか、今回は口語俳句、私の廻りには伴侶を失った人が大勢いる、その中でもこの句の明るさ、その裏の哀しさ。空気という措辞は私に感銘を与えてくれた。

永井 潮

海濁る空濁るそして俺も

辻 升人

ほとぼしる感情から繰り出される言葉は力強い。濁るとは、清らかさ正しさが失われ、煩惱が生じた状態をも言う。と広辞苑にある。海と空をわが身に置き換え青春を回顧する若さが潔い。自由律の書き方が省略した部分も滲み出ていて味わい深い。

高瀬多佳子

空よりも海の匂いの渡り蝶

高野 公一

アサギマダラと呼ばれる蝶は2千キロもの距離を南西諸島へと移動するという。この句の渡り蝶もある時は海の匂いがつくほどに海面近くを飛びながら長い距離を飛んでゆく。目指すのは、幼い頃に南の島で戦没した父の面影が見えるブーゲンビル島か。

遠山 陽子

空よりも海の匂いの渡り蝶

高野 公一

渡り蝶を見たとき、遙か遠方から飛来したその小さな姿に、誰しもが、健気さ口マンを感じずにはいられないだろう。作者は、蝶が遙々と海を渡って来る姿を想像し、そこに海の匂いを感じ取ったのである。口マン溢れる一句だ。

中條 啓子

幸福度の低い国ですカタツムリ

芹沢 愛子

日本の現状を、独特の優しさと悲しさとユーモアを交えて表現されたことに拍手。幸福度が低いだなんて、本当に悲しいことだ。でも、変えていけるかどうかは別として、何か言わなければ。かたかなのカタツムリが効いている。

田山 光起

ギトギトの恋がお終い遠花火

三池 泉

日本語はオノマトペの宝庫である。「ギトギトの」がベトベトしたイメージを適切に言い当てている。この句の作者はおそらく女性、恋に対する男女の執念の違いを感じる。そして、「遠花火」がいい。空間の距離だけでなく、時間の経過を示している。

徳山 優子

空よりも海の匂いの渡り蝶

高野 公一

渡り蝶は「アサギマダラ」の事でしょうか？広い広い水平線に向って行く蝶。その優雅な姿が想像されます。そして公一さんも私達の世界から旅立っていかれた。公一さん、四人でお茶しましたね。もっとお話したかった。ありがとうございます。合掌

中田とも子

いつだつて女は強し姫女苑

根岸 操

外科医の知人が言っていました。男性と女性の患者が同じ状態で運ばれて来た時、女性なら助かるそうです。生物としても女性は強いようです。嬬やかな姫女苑、びったりの季語ですネ。感服！

夏目 重美

空よりも海の匂いの渡り蝶

高野 公一

浅黄斑を初めて観察したのは、高峰高原散策中のことであつた。樹間を舞う姿からは、渡りの生態など俄に信じられなかつた。作者の人生観、生命観が十七音に迸る。蝶も又空と海とを懸念に生き抜いている。

成戸 寿彦

泡ひとつ金魚の言葉聞きもらす

望月 哲士

同居の金魚が泡をひとつ吐いた。つぶやくように何か言ったようだ。我が家でも妻が時々、金魚が泡を吐くごとく言葉を発するが、独り言なのか問いかけられたのか聞きもらすことが多い。日常生活のひとつこまを金魚に託した、俳諧味のある作品。

西前 千恵

メモしたメモ忘れ来し梅雨の街

飯田 玉記

「メモしたメモ忘れ来し」とは、私と同じ事をと嬉しくなる。私も買い物に行き、さあメモをと探せどないので、仕方なく買物をして帰ると机の上にありました。でも、何とかなりますよね。これからもどうぞお元気に楽しい御句をお願いします。

西村 智治

夫婦という漸近線や半夏生

石橋いろり

この句、不思議な重層構造を持つているようだ。漸近と言いながら、離れて帰らぬものの姿があり、同時に動かせぬものがある。その夫婦をつつんで、半夏生をもってきた。季節のことなのだろうが、筆者には、葉の二色の移ろいが、より見えてくる。

根岸 操

葉を刻む手もと明るき五月かな

秋山ふみ子

日差しさすキッチンが目につかんできた。上五中七のフレーズが一気に五月にかかつていて、いそいそと料理をする作者の暮らしぶりが想像できる。「手もと明るき」がいいですね。手元という小さい所を詠むことを心がけたいと思つた句である。

野口 佐穂

戦争に注意 白線の内側へ

大井 恒行

「白線の内側へ」で、戦争が電車のようにやってくる情景を想像する。戦争が電車のように来るかどうかは異論もある。しかし、非日常の戦争を日常化して見せたところが俳句と思う。一字空けは、そのための演出だ。印象鮮明で記憶に残る一句。

野島 正則

母の日の妣がついている紙風船

堀部 節子

妣は、亡くなった母を示す表記であり、俳句ではしばしば使われる。仏壇に置かれている紙風船であろう。妣が自ら造つた紙風船なのであろう。風もないのに、弾んでいるのは、孫や曾孫と遊びたいのであろう。

萩原 美沙

墓洗う父と母との背中から

渡部 洋一

お盆を控えて墓前に、万感の思いで立つ作者。ご両親の誠実さが何え、作者は常にその背中を見て過ごされたように思われます。思いを馳せながら、念入りに洗い上げた墓石の裏側は正に両親の背中……。深く胸を打つ一句です。

蓮見 徳郎

蟻の列いけるとこまで行くつもり

津久井紀代

もちろん蟻にもつもりがあつての日々の営みでしょう。さて俳人は。行き止まりに来たら引き返すか、それとも行倒れて生を終えるか、そんなに深刻に考えることもないのか。作者の心のゆとり、愉快を伝えてくれる、想像の幅の広い句です。

平山 道子

ミニトマトころがる朝のJアラート

小林 育子

テールに盛られた赤いミニトマト、家族の平和な一日が始まる朝のひととき、突然Jアラートの警報音が響き渡る。全国瞬時警報システムが発令である。何事か？どこへ避難する？ミニトマトはもうころがるしかない。昨今の恐怖の日常化に共感。

淵田 芥門

湖の底出づや天竜夏の潮

夏目 重美

諏訪湖から伊那谷を遠州灘へ一気に南下する大河緩急の白波、青海原の入道雲。「天竜、雲の峰に昇らんと大海に出づ」などは無用の深読みか。伊那の井上井月、「天竜や夏白鷺の夕ながめ」より景は雄大だ。上と下句の並立、中間切れの韻律がいい。

冬木 喬

新茶汲み八十路の日々を味わいし

根岸 敏三

穏やかな日常のひとつまが淡々と描かれている。だが、この八十路には戦争と戦後の混沌などを経た重い歳月がある。今、世界に暗雲が垂れこめていて。だからこそ、平穏な日々がつづくことを願った一句と読みたい。

堀部 嘉雄

海月に降るマリンスノーやミサイルや

安西 篤

海月の生息に、なくてはならないマリンスノーである。今年、北朝鮮から発射されたミサイルは十四回を数え何れも日本海に着弾。生物にとって必要なものと不必要なものがある。特にミサイルなどは言語道断である。作者の思いが込められた句である。

三池 しみず

台紙だけ残るアルバム夏の風

玉井 豊

アルバムには、人生の様々な場面の写真が沢山収められています。それなのに台紙だけが残っているとどんな理由があったのでしょうか。色々な事を想像させてくれるドラマのような句です。「夏の風」の下五が利いています。

三浦 禎三

紫陽花や花いちもんめ女の子

神崎 幸子

この句を拝読後、幼少の頃、女の子と一緒に遊んだ歌を思い出しました。改めて日本童謡（花いちもんめ）を調べてみました。花を売る側買っ側の駆け引きさぞうです。現社会にも通用する、駆け引き、俳句の奥の深さに今更ながら感心しております。

水落 清子

いつだつて女は強し姫女苑

根岸 操

初夏から秋にかけて白い花を咲かせる。薄紅もあるようです。繁殖力は強くどこにでもさりげなく咲いている。上五の平明なひらがなに惹かれます。この夏の酷暑にもはや体力の限界を感じておりますが、精神力は御句のようにありたいと強く思いました。

武藤 幹

泡ひとつ金魚の言葉聞きもらす

望月 哲土

大人の佇まいの中、これほど面白くユーモアに溢れた句は珍しい。しかもリアリティがあり、映像があり、共感性もある！私も金魚の句を多く詠んでいるが、お見事！脱帽！である。最後の一語か？口の動きの確認を、ひとつの泡が邪魔をした！

村井 一枝

ただいまもどりました八月の空耳

蓮見 徳郎

生前、帰宅時に必ずただいまもどりましたと声かけていた。残された家族にとり決して忘れられない言葉、亡くなられた方の魂は家を離れないと。空耳でなく家族を思い帰られたのでは。失礼ながらそう思えるのです。世には不思議なことがあります。

望月 哲士

空よりも海の匂いの渡り蝶

高野 公一

安西冬衛の「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた」を想起した。空に舞う蝶より海を渡る蝶の飛翔力に感動したのでろう。渡り蝶が恰も急逝された作者自身を暗示しているように感じた。果たして何処へ渡つたのであろう。「渡り蝶」が眼裏に残った。

守谷 茂泰

葭切や川より低く人住める

江中 真弓

葭切の鳴く川のほとりに沢山の人たちの住む町がある。「川より低く人住める」という描写から、高い堤防と、その下に広がる町並みが見えてくる。そして町の人々の佇まいや、息づかさも感じられるような気がした。

山崎せつ子

階段の一段ごとの暑さかな

石原 俊彦

今は、エレベーターやエスカレーターが完備され、だいぶ楽になったが、まだまだ階段を利用することが多い。私の団地も階段で三階に住んでいるため、上り下りが多い。特に夏は、暑くて汗を拭き拭き登る。早く秋が来てくれることを祈りながら。

山崎美紗緒

白無垢の遠き昔や桜貝

長野 保代

白無垢を着たのは、ひと昔もふた昔も前のことである。俗に云う棺桶に片足を入れた年令になった今では、すべてが懐かしい限りである。今は自分が想像だにしなかつた長寿を賜り、早々にあの世に逝つてしまつた夫や友人を恋うるのみである。

山本 徳子

台紙だけ残るアルバム夏の風

玉井 豊

貼つてあつた写真はどこにいったのでしょうか。額に入れ替えて見ているのでしょうか。現代はスマホ写真が多くなりましたね、あの懐かしい写しは夏の風と共に舞いつつていつてしまつたのでしょうか。

豊 宣光

階段の一段ごとの暑さかな

石原 俊彦

年を取ると、階段を上るのにも体力を使います。上り初めは楽に思えても、途中で足が疲れてきます。我慢して上り続けると汗がにじんできます。まさに、一段ごとに暑さを感じるのです。なんでもないような句ですが、作者の気持ちが理解できます。

吉川 真美

墓洗う父と母との背中から

渡部 洋一

亡きご両親のお墓参りで「父と母との背中から」という表現に、まるでご両親の背中をいたわり慈しむかのように墓石を洗う作者の姿が見えてくる。亡くなられたご両親への、より一層募る深い愛情と感謝の思いが感じられ、じんと胸に迫る。

吉平たもつ

ただいまもどりました八月の空耳

蓮見 徳郎

八月と言えば六日、九日、十五日と忘れられない忌日が続く。私は戦後の八月生まれだが、戦争で犠牲になった身内の人はいない。作者には、若くして戦死した方がいるのだらう。ふとしたはずみに今でも忘れられないその人の声がする。戦争反対！

米澤 久子

ただいまもどりました八月の空耳

蓮見 徳郎

「ただいまもどりました」この言葉を待ち焦がれていた人達が数多いました。最近掘り出された遺品が遺族の元に帰ったニュースにはっとしました。お盆です。せめて魂だけでも「ただいまもどりました」と。八月の空耳、悲しい期待の措辞と思います。

あけぼの便り

- 前号で斉田仁様に片頭痛の拙句をご鑑賞いただき有難うございました。信長の片頭痛の逸話初めて知りました。信長好きの私、「鶏頭や信長のマント翻す」という句を昔詠んだことも。（石橋いろり）
- 川島一夫様、三浦土火様、147号にて拙句をご鑑賞いただきありがとうございます。嬉しくこれからの励みに致します。（門野ミキ子）
- コロナの次は猛暑。不要不急の外出無用と。たしかに狂気の暑さには参ってしまふが俳人の端くれの身としては、この危機的状況も俳句の種にして遊ぶ術しか無いと思考しております。（亀津ひのと）
- 体調を崩し家の周囲しか歩けなくなり、リハビリ中です。（川島一夫）
- 小林育子様、白戸麻奈様、前号にて拙句を取り上げて下さり有難うございました。嬉しく拝読させて頂きました。（城内明子）
- この猛暑、若い頃は何とかしのいでいましたが老いの身にはつらい日々。でも俳句がある！もうろうとした頭で駄句をひねっております。お笑いください。
- 狭庭に胡瓜を植えましたら、沢山取れました。未だ暑いので、種子を採り二期作に挑戦しています。苗が30センチほどに育っています。（清水弘一）
- スタッフの皆様いつも有難うございます。今回は遅れぬように早速作品をまとめております。歌曲の会でも短歌の会でも若者が少なく、骨を折って下さる皆様感謝しております。「あけぼの」はいつでも完璧に整えて下さり有難くお礼申します。（高原桐）
- いつもお世話になっております。リハビリを頑張っているのですがなかなか思うように動けないでいます。まだまだ暑い日が続くようなので熱中症には気をつけたいですね。（飛永百合子）
- 正に酷暑です。以前は朝夕は涼しい時間がありました。現在は目が覚めた時には二十六、七度と決して涼しいとは言えません。「秋暑し地球の劣化かと思ふ…」（中田とも子）
- 中野淑子様、前号で拙句のご鑑賞を頂き有難うございました。油をさして少しずつ動くようになり、糸通しも思い出せるようになりました。（長野保代）
- 御岳山の宿坊に泊まりレンゲシヨウマを見ってきました。隣の宿坊は、雅楽『十二音会』の合宿中、思いがけず優雅なひと時を過ごしました。（夏目重美）
- 久し振りに「多摩のあけぼの」を手にし嬉しく楽しく拝読いたしました。編集の皆様ご苦勞様でした。これからも宜しくお願い致します。永井様お体くれぐれもお大切に下さって下さい。（西前千恵）
- 朝散歩をしています。川にカワセミがいます。かわいいですね。飛永百合子さん、前号で拙句をとって下さり有難うございました。（根岸敏三）
- 長く続く猛暑、年寄りには特にキケンといわれ、暑さを俳句ができない理由にしています。寝たままで最後まで句作を続けた子規って凄いですね。（野口佐穂）
- 編集部の皆様のお骨折りに感謝申し上げます。（萩原美沙）
- 幸村睦子様、147号で私の「猫の句」をご鑑賞頂きまして有難うございました。すっかりご無沙汰ですがどうぞお元気に。（平山道子）
- 初夏に全治三か月の大けがをしました。連日の猛暑に何とか耐えてリハビリ頑張っています。秋が短い気配です。皆様おケガのないようよき日でありますように。

(三池泉)

○危険な暑さとまで言われる今夏の異常気象にはうんざりですが、庭には夏の終わりを告げる凌霄花の花が今を盛りとみごとに咲き、少々気をよくしています。例年蛾にやられて花数が少なかったので早めに消毒をしていたのが功を奏したようです。

(三木冬子)

○前田光枝様、前号で拙句をご鑑賞いただきまして有難うございました。素敵な散歩コースですね。仲睦まじいお二人の姿が目につかびます。いつまでもお二人の散歩が続きますように。

(水落清子)

○母が他界して八月は長く実家で過ごしました。十五年前に妻に先立たれた時には、ほとんど句には詠めませんでした。母の場合は句に詠もうと心がけています。が、肉親の死を詠むのは難しいものだとつくづく感じています。

(満田光生)

○鳥彩可様、前号で拙句「ひこばえ」の句をご鑑賞頂きありがとうございます。老齢のわたし、俳句あつての日々です。これからも頑張ろうの励みになります。

(宮腰秀子)

○コロナ禍などでまだ一度も集まりに出席していませんので「第41回多摩地区俳句大会」10月29日(日)には出席する事

に！愉しみです!!

(武藤幹)

○大変内容の充実した会報を読ませていただき厚くお礼申し上げます。

(森本由美子)

○連日の猛暑に辟易しております。皆様どうぞご自愛くださいませ。(山崎美紗緒)

○前号にて拙句をご鑑賞頂きました安西様、飯田様、宇賀様、鈴木浮葉様、宮崎

様、森本様、大変感激致しております。

大きな励みと力を戴きました。ありがとうございます。残暑きびしき折れくれもご自愛のほどお祈り申し上げます。

(好井由江)

○今まで経験したことがないような猛暑の日が続いて、郷里の北海道でも36℃37度となり驚きました。夏の疲れが出てくる時期ですが、皆さまどうぞ御自愛下さい。

(吉川真実)

○猛暑続きです。皆様充分気をつけて頑張りましょう。一日一個の梅干しも良いそうです。

(吉澤利枝)

○8月10日高野公一さんの葬儀に参列して参りました。外苑前の浄土宗のお寺にてのご立派な心通うご葬儀でした。皆の悲しみと感謝の気持ちをもとめた追悼句を、黄泉の国へと携えていただけたらと

お届けしてまいりました。玄関の高野さんの俳句コーナーに飾っていただけただけで、高野さんも気づかれたかと。献花はどれも緑色に統一されて、八ヶ岳の風を感じさせるものでした。(石橋いろり)

高野公一さんご逝去

当会参与の高野公一さんが、静養先の長野県で病気のため急逝されました。享年八十二歳でした。

高野さんは芭蕉の「奥の細道」の研究を極められ、「天空の越後路―芭蕉は荒海を見たか」で平成二十七年現代俳句評論賞を受賞、その後同賞の選考委員に就任。平成二十九年には、「芭蕉の「天地」―雲の峰はいくつ崩れたか」で第二回ドナルド・キーン賞を受賞。令和三年に、研究の集大成として「芭蕉の天地「おくのほそ道」のその奥」を上梓されました。

本誌にも前号まで句や鑑賞文を投稿しお元気だったのですが、突然の惜しまれるお別れになってしまいました。

八月十日の葬儀には当会から石橋いろりさんが参列し、有志の方々から急遽寄せられた追悼句をささげました。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

高野公一さんへ捧ぐ（追悼句）

良き評のこころに残る夏の句座 吉村春風子
 芭蕉葉を抜け男を宿しけり 永井 潮
 穏やかな優しい笑顔秋の雲 根岸 敏三
 星々の大河をまはる船の旅 根岸 操
 合歓の花象潟語る髭の人 大森 敦夫
 清里の一人旅立つ風の中 戸川 晟
 散りてなおおもかけ濃ゆき沙羅の花 佐々木克子
 「ほそ道」の奥へ闇へと大螢 稲吉 豊
 みちのくはいま祭どき矢立せむ 水野 星閣
 鳴く亀に翼ありけり友乗せて 三浦 土火
 遣されし『芭蕉の天地』涼しかり 満田 光生
 祈るほど近くて遠い天の川 飛永百合子
 どのあたり芭蕉の道を追う人は 蓮見 徳郎
 星月夜語りしすがた思い出す 山崎せつ子
 手花火の滂沱となりし夕べかな 安西 篤
 いつまでも吟じて下さい陸奥の夏 玉木 康博
 蕉翁の目線で夏の最上川 石原 俊彦
 蝉声のさざなみのご胸中へ 秋山ふみ子
 白靴の踏跡著しダンデイズム 関 梓
 涼風のように言葉をありがたう 松元 峯子
 異国の風の話まだ終わらぬに 森本由美子
 遠雷や父の面影ブーゲンビル島 植竹 利江
 螢火や芭蕉の心追ひ続け 青木 隆
 惜別の思いや濃ゆしピア・ガーデン 白尾 幸子
 パナマ帽「風の中へ」とかもめ飛び 高瀬多佳子

蝉時雨師在りし「山河」今朝届く 田村 當麻
 清里の白き花々夏逝けり 尾崎 太郎
 ほそ道は粹に煌めき天の川 石橋いろり
 令和五年八月十日 於 浄土宗梅窓院観音堂



葬儀場の追悼句

第6回 俳句研究会

6月17日（土）武蔵野市かたらいの道・

市民スペース

担当幹事

根岸操・秋山ふみ子・
 佐々木克子・蓮見徳郎・
 大森敦夫・石橋いろり・
 根岸敏三

参加者25名

★講話……なし

葦切や川より低く人住める 江中 真弓
 信号の音ぬれてゐる街薄暑 秋山ふみ子
 水馬水面の雲を掴みおり 根岸 敏三
 何や彼やほど良く忘れ冷素麺 稲吉 豊
 徹頭徹尾平和主義です蝸牛 戸川 晟
 父の日や顔も知らない父なれど 石原 俊彦
 橋いくつ渡れば故郷雲の峰 佐々木克子
 サイダーの一気飲み「不採用」を眺めつ 石橋いろり
 老鶯の一部始終につきあわず 高野 公一
 白シャツを棲のやうに干す男 大石 雄鬼
 枇杷たわわ下宿屋疾うに廃れあし 淵田 芥門
 なるようになる母の口癖さくらんぼ 西前 千恵
 ジブリへは上水沿いです桜桃忌 内田 牧人
 夏薊銃後の丘となつてゐる 小山 健介
 紫陽花に囲まれて食ふ塩むすび 根岸 操
 ゆふがほの強靱鉄路掻ひ潜り 山本ひまわり
 梶子の錆びゆくまでの逢瀬かな 森本由美子
 どくだみの花の明るき朝の雨 尾崎 太郎
 谷底へ風が運びし夏帽子 三浦 土火
 使はねば忘れゆく季語肝試きまためし 吉村春風子
 蔓伸ばし庭の苺も親離れ 大森 敦夫
 原書並ぶ牧野の書齋額の花 青木 隆
 通り雨また来るといひ別れけり 蓮見 徳郎
 梅雨なれど女坂ゆかず男坂 玉木 康博
 昼顔や日常というやすらぎ 松元 峯子

初夏の吟行会

日時 令和5年5月7日(日)
場所 国営昭和記念公園
花みどり文化センター

参加者 33名

ゴールデンウィーク最終日の五月七日雨模様の中、昭和記念公園にて初夏の吟行会が行われました。この公園は、大正十年から陸軍飛行場として使用され、戦後米空軍基地として接収。昭和五十八年に天皇在位五十年を記念して開園したという立川・昭島両市に延びる広大な国営公園です。立川駅より徒歩十分ほどのあけぼの口そばの総合案内所に十時に集合し、自由散策が始まりました。

立川口ゲートを過ぎると整然としたイチヨウ並木が連なり、その先に森を貫く道がまっすぐに伸びています。(乗り降り自由の「パークトレイン」は一時間で園内を一周してくれます。)

この日は雨予報のせいか、森の木々に囲まれた道を歩く人の姿はまばらで、楠の豊かに盛り上がる若葉、山法師や朴の木の花などが印象的な森の風景が静かに広がっていました。道はやがて、広い池に出て、水辺に沿って行くと睡蓮の咲く小さな

池が。ハーブ園、ネモフィラの丘を過ぎると、ポピーの群落到に縁どられた広い草原に。まだ先には日本庭園などあるようでしたが、投句メ切りのため引き返しました。涸れた残堀川沿いの道は、武蔵野の雑木林の小径という趣があり、場所により多様な風景が味わえました。吟行の間、広大な園内は閑散としていましたが、鶯や鳥の囀りに包まれ、草花の息吹きを堪能し、初夏という季節を感じることができました。

句会場は「花みどり文化センター」というあけぼの口側の施設。台地の縁をくり抜いて建てられた、ちよつと洞窟めいた施設です。ガラス張りの壁に囲まれた円形の会議室には、初めての方十名を含む三十三名の参加者が集いました。「花」と「みどり」を織り込むという兼題のため、多種多様の句が集まり、園内の開花状況を互いに知ることもできました。一



位の和哥月梗香さんは異国の基地の街と表現し味わいを深くした。二位には高校生の西野奏子さんが緑陰の風を詠み、三位には川畑亜紀さんが万緑の小道を詠んだ。上位七人の表彰が行われ、公園オリジナルグッズが景品として渡されました。(尾崎太郎記)

初夏の吟行会作品

上位入選十句

万緑やかつて異国の基地の街 和哥月梗香
緑陰や風はかたちをすぐかえる 西野 奏子
万緑にさらわれてゆく小道かな 川畑 亜紀
いつだって女は強し姫女苑 根岸 操
葉桜や胸の深くにある軍都 小山 健介
トリアノンまで新緑の奥へ奥へ 満田 光生
囀りやはぐれて一人花めぐり 石橋いろり
どこまでも歩ける靴よ花苺 高瀬多佳子
横道にそれて一灯著莪の花 宮腰 秀子
刻々と緑濃くなり雨催い 山口 萌黄

一人一句

ジヨグの人みどりに溶けてまた現わる 石原 俊彦
姫女苑犬に引かれて万歩計 池田 麻衣
掌にふれてみどり失う皃月雨 高野 公一
新緑や大樹に抱かれ心解く 泉 信也
摘み取ろうか白詰草をしばし観る 玉木 康博

緑広がる昭和の遠い遠い 戸川 晟
葉桜や六十にして「罪と罰」 石川 春兔
パークトレイン緑の闇に消えゆきて 多田 文代

とおぼこの花のかんむり戴冠式 押見 淑子
曇天に泰山木の花ふたつ 根岸 敏三
山法師一緒に詠おう今日の幸 松元 峯子
雨催いみどりいっばい滲みたる 山崎せつ子
雨催い群れるを嫌うタンポポは 中山 愚海
のんびりと連休未日けしの花 南行ひかる
昭和平成令和を生きし樹々若葉 池田めだか
我ひとり銀杏若葉の並木道 尾崎 太郎
噴水や万の緑を溶かしこむ 亀津ひのとり
遠景のビル喰ひ荒らす青葉かな 大森 敦夫
えごの花大樹の陰に枝ひとつ 山本ひまわり
子どもらと並ぶネモフィラ夏来る 青木 隆
白クローバー粉まいたよう芝おおう 森本由美子
緑風や残る三年如何生さる 三浦 土火
立川の雑踏離れ夏来る 関 梓

第7回 俳句研究会

7月15日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 石橋いろり・秋山ふみ子・

玉木康博・満田光生・
山本ひまわり・石原俊彦・
戸川晟・佐々木克子
参加者19名

★講話……なし
(俳句大会・秋の吟行会のお知らせがありました。)

わが影に潜れぬものか炎天下 吉村春風子
同じ物二つ買ひたる暑さかな 秋山ふみ子
息止めて4L西瓜両断す 石橋いろり
鉄砲百合風のうわさに耳すます 松元 峯子
階段の一段ごとの暑さかな 石原 俊彦
鍵閉めたかな炎天を引き返す 飯田 玉記
昼寝覚め一期一会の青畳 小野こうふう
向こうでも匂会揚羽を追ってゆき 小山 健介
虎の尾の皆こちら向く日陰道 山本ひまわり
夏帯やあくば咲かせる目の会釈 稲吉 豊
魂魄も溶けだしそうな暑さなる 佐々木克子
検査室の夫待つ廊下西日さす 西前 千恵
溽暑の夜駅に妖婆が立つている 淵田 芥門
夏逝きぬ焦げた根つこの香を残し 森本由美子
月島の朝顔絡む古格子 尾崎 太郎
魚あたり信待つ胴衣の男夏の湖 青木 隆
外人が一番を切る山開き 戸川 晟
合歓の木が子らを見守り眠る夕 玉木 康博
空家てふ夢の残骸へ緑雨 満田 光生

第8回 俳句研究会

8月26日(土) 立川市子ども未来センター
担当幹事 満田光生・秋山ふみ子・

玉木康博・石橋いろり
山本ひまわり・大森敦夫
参加者22名

★講話……石川 春兔氏「子どもと俳句」
桐一葉行方の知れぬこの世界 尾崎 太郎
角のなき消しゴム一つ処暑の風 石川 春兔
古戦場狐の剃刀咲くあたり 小山 健介
手に重き形見の時計敗戦忌 石原 俊彦
あめんほのひとかきしてはひと休み 根岸 敏三
九月かな確しかと定まる物の影 稲吉 豊
気を抜けば我も即身仏の残暑 石橋いろり
加齢です妙に納得秋の空 吉村春風子
小上りに脛うち投げて団扇かな 淵田 芥門
廃屋の存在証明紅カンナ 山本ひまわり
星祭思ひの違ふ夫婦かな 秋山ふみ子
新秋や星雲けふる辺りより 亀津ひのとり
打水の淫らにながれ生家あり 大石 雄鬼
爆音の轟く街の雲の峰 青木 隆
蟬の声すこしさびしくなる夕 山崎せつ子
野分くる空欄のなき予定表 根岸 操
CDから昭和の名曲盆の夜 玉木 康博
名月や研ぎ澄まさる二の鳥居 戸川 晟
母は亡し書類に紛れある残暑 満田 光生
断捨離で住まいも軽く晩夏なり 飯田 玉記
妻入の路地に西日や海に出ず 大森 敦夫
都市農家金柑の実のたわわかな 西前 千恵

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。【意見幹事担当】

「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「都多摩」へと進んでください。

★令和六年度定時総会 並びに陽春句会

日時 令和6年3月23日（土）午後2時
会場 武蔵野スイングホール

J R 中央線 武蔵境駅北口より徒歩2分
（詳細は次号でお知らせします）

★会員の現況（9月末現在）

230名（正会員186名・一般会員44名）

☆新入会員 0名（敬称略） *印は正会員

◆多摩地区協へのご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で当地区会員になつた方の会費は無料です（新規に現代俳句協会会員になつた方で当地区に入会）ご希望の方は別途申し込み手続きが必要でです。それ以外の方は年会費2千円です。お問合せ、ご連絡は事務局（下欄枠内）まで

「多摩のあけぼの」 編集担当幹事

満田 光生（光） 飛永百合子（百）

山崎せつ子（せ） 永井 潮（潮）

◇◇◇◇◇ 今 案 内 ◇◇◇◇◇

俳句研究会

第11回 11月25日（土）午後1時

立川市こども未来センター

立川駅南口徒歩13分

（とじ込みはがきの地図参照）

電話042・529・8682

*講話 董 振華 氏

第12回 12月23日（土）午後1時

立川市こども未来センター

*講話未定

第1回 1月27日（土）午後1時

立川市こども未来センター

*講話未定

（いずれも会費五百円、出句三句）

○感染防止を心掛け、体調不良（発熱等）の場合は積極的にお休みください。お出かけ前の検温とマスクの着用をお願いします。

〈在宅句会〉終了しました

九月の俳句研究会をもって企画の一区切りとして終了になりました。長い間ご利用いただきありがとうございました。

投句いただいた方々、評文を寄せられた皆さんに感謝申し上げます。担当スタッフの皆さんもご苦労さまでした。

編集後記

☆八月初めに母が他界。覚悟していたことで、天寿は全うしたが、受け入れるのは辛い。が、俳句に長く関わってきた者として、これはきちんと句にせねばならないと自戒している。（光）
☆狗尾草の繁殖が凄い。ちよつとした隙間に根を張り、夏の間はかわいい尾のような緑を伸ばし今は穂を金色に輝かせる。俳人には見逃せない題材。狗尾草にそつと教えてあげたい。（百）
☆人にとつての猛暑はベットの犬にも厳しかったらしく、家に閉じこもっているばかりでした。散歩も涼しい時間帯に肉球にやさしい靴を履かせ、片陰を選ぶなど大変気を使いました。（せ）
☆編集の関梓さんがご主人の看護などご家庭の事情で幹事をお辞めになった。会報記事の作成や校正など早くして正確な仕事は頼りがいがあった。とりあえず満田さんなどに代わっていた。新しい幹事さんを求めています。（潮）
―題字は三橋敏雄氏―

令和五年十月二十七日発行

発行人 吉村春風子

編集人 永井潮

発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局

〒181-0015

三鷹市大沢2-1-07

大森敦夫方

印刷所

株式会社 清水工房

TEL 090-9389-4821
FAX 0422-3010934
TEL 0422-62012626